

〈特別講演〉

国際金融システムの現状と展望

国際通貨研究所理事長（元財務官） 行天 豊雄

1980年代以降、世界経済は歴史的、構造的な変化の波に洗われている。この変化の中で2007年のサブプライム・ローン危機は「新しい時代の危機」に燿変した。現在世界経済はおそらく第二次世界大戦後もっとも重要な過渡期にあり、しかも、その先に何があるのか、全く予見できない。

構造的変化は三つある。第一は経済成長パターンの変化であり、第二は金融と情報のグローバリゼーションによる資本主義の質的転移であり、第三は世界経済の重心の移動である。

過去数十年に亘り、世界経済は米国の過剰な家計消費とアジアの過剰貯蓄との相互依存という非合理的構造の上で成長を続けてきた。このパターンは必然的にグローバル・インバランスを激化させたが、同時に全世界がその恩恵を享受していたため、成長パターンを主体的に自発的に変更しようという動きは起らなかった。しかし、2007年危機は、それが齎らしたグローバルな需要の崩壊と信用の収縮によって、この成長モデルの持続を不可能にしてしまったのである。

1980年代に始まった金融と情報の爆発的な革新と拡大によって、世界経済は金融と情報のネットワークにおおわれた単一の市場になった。金融・情報資本主義の時代が到来したのである。この経済で、実体経済と金融・情報の役割は主客転倒した。

この革命は世界経済に全く新しい市場を提供し、大きな雇用と所得の増大を齎らした。しかし同時に、それは市場への過信とリスクへの麻痺を生み、伝統的な社会のガバナンスと規範とモラルを大きく揺さぶっている。

先進国経済の停滞と新興国経済の高成長により、世界経済の重心が移動している。端的には、米国から中国への覇権の移転である。

米国は双子の赤字と対外債務の累増で、基軸通貨ドルへの信認が傷付いている。一方中国は、一党独裁制と大衆の物質的欲望の解放の併存という政策の成功で世界第二の経済大国に躍進した。しかし、人口、資源等の内部矛盾も深刻化している。

世界経済は明らかに一極体制から多極体制に移行している。一方ではグローバリゼーションが進行し、他方では国民国家間の競争やテロリスト集団の活動が活発化している。21世紀の半ばに向けて、世界経済はこの歴史的転換期にどう対処するのだろうか。